



妊娠が判明した時、手放して喜ぶ人ばかりではありません。さまざまな事情から「困った」「どうしよう」と悩み、誰にも相談できず、おなかだけがどんどん大きくなっていく——というケースも。そんな千差万別の悩みに寄り添うため「にんしんSOS東京」の相談窓口が開設されて約1年半。理事の土屋麻由美さんに、現在の活動について聞きました。

にんしんSOS東京 理事 助産師 土屋 麻由美さん

生後0日目の 虐待死を防ぐ

■設立の経緯は？

2015年、熊本市の慈恵病院(「このとりのゆりかご」)連絡「赤ちゃんポスト」を運営している相談のうち28%が東京を含む関東圏からで、「1人で産み、傷や出血のある状態で、片道切符で赤ちゃんを抱えて熊本まで来る人もいる」と伺い、東京にも相談窓口の設置を動き始めました。

■支援体制について

妊娠の経緯は人それぞれ

「にんしんSOS東京」を設立しました。

親が加害者になるのを防ぎたい、虐待死をゼロに——と、15年9月に助産師6人、社会福祉士1人で任意団体として発足。資金はインターネット上のクラウドファンディングで募り、多くの方の支援のもと、同年12月から相談支援窓口を開設。16年3月に一般社団法人「にんしんSOS東京」を設立しました。

れ。思いがけない妊娠がいけないのではなく、問題は相談できる人が誰もおらず孤立すること、自己決定ができないこと。私たちは「産む産まない」「育てる育てない」を本人が選択できる手助けをし、どの道を選んでも全てに寄り添います。「中絶容認か」と批判されることもありま

すが、産めない場合の支援が社会にない現状では、どちらの選択も支援することは大きいと考えます。

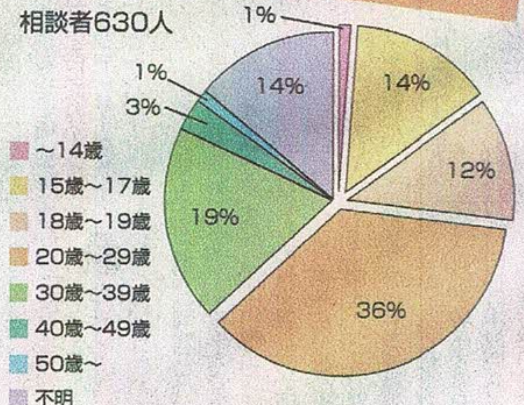
相談は医療・福祉系国家資格保持者が受けられます。行政関係の窓口は匿名による単回相談で、午後5時までのところが多いので、私たちの電話相談は同4時から午前0時まで年中無休にしました。

相談は無料で守秘義務厳守。電話代が負担にならないよう、1回30分程度で何分でも話せる仕組みです。メールは24時間265日受け付けています。

「行ってね」とか「この番号に電話してね」と言うだけでは、それっきりになる場合が多いので、相談してくださった方をワンストップで現場につなぐため、自力で関係機関に行けない場合は一緒に行きます。相談は全国から来ますが、行けるのは関東圏です。

出産する場合は地域の保健センターの保健師さんにつなげ、その後のことをお願います。同行しない場合も、その地域の行政の福祉窓口の相談員の名前を伺い面書をつなきます。

「ちや・まゆみ 大病院、助産院勤務などを経て1997年4月、出張専門の助産師(当時)として「麻の実助産院」を開業。自宅出産・母乳育児相談・性の健康教育を行う。「にんしんSOS東京」理事。2男1女の母。練馬区・中野区の妊産婦・新生児等訪問や、保健センターでの母乳支援・母乳・育児講座担当、産科加害者大学書院実践開発センターで「あかちゃんかやっこ」講師を担当。幅広く活動中。



午前0時まで電話相談 時に同行支援も行う「にんしんSOS東京」

■自分の仕事の傍ら午前0時まで電話を受け、同行支援までする団体は珍しいのでは？

相談員は18人で、社会福祉士がいるのは強みです。子どもがいる人が多く、担当時間は転送された電話を自宅でも受けられます。相談者の中には自己肯定感の低い方もいて、言葉を選ばないと「じゃあもういいです」となってしまうので、支援が切れないように、話し方が重要になります。

ライフスタイル



思いがけない妊娠の 全てに寄り添いたい



「にんしんSOS東京」のトップページ (9月リニューアル予定)
<https://ninshinsos-tokyo.com/>

■相談者の状況は？
約1年半で寄せられた相談は6330件。「妊娠したかもしれない」とい

「かもしれない」 段階で相談を

う相談は多いです。親にも誰にも言えない状況の方が他に相談できる場所がないと、未受診で母子手帳も未発行のまま誰にも知られないように過ごし、一人で産んで遺棄してしまう。または何とかお金を用立てて中絶する、という選択になってしまいます。

この段階での支援が充実していれば、もっと違う選択が可能になります。産む場合に交付される妊婦健診の補助券も、妊娠の診断や初期の診察には使用できていないのが現状。こうした知識もお伝えします。

妊娠ではなかった場合は、また同じ思いをしないための話や、性感染症などの話をします。この段階で私たちに繋がったことが、彼女たちのステップアップになればと思っています。

相談者の年齢はさまざまで、既婚者でも産めない方は多いです。10代は27%、10代と20代合わせて63%。月経や避妊、排卵

社会につなげて いきたい

■具体的な内容は？
妊娠検査薬を勧めても、現実に向き合うのが怖くてできない場合は、実際に会ってトイレで検査するのに付き合ひ、結果を一緒に確認します。お金がなく、どうしても買えない場合は、検査薬を送ることもあります。多いのは、妊娠を伝えたら相手にLINEをフ

のタイミング、月経周期などの知識が十分でない方が多いです。彼と2人で電話してきたり、男性からの相談もあります。

着障害、性的被害、夫や恋人からのDVなどに、さらに妊娠という問題が重なります。出産して育児困難や産後うつになる必要支援家庭になります。中絶だと保健師さんもお分からない状態。私たちは妊娠だけでなく、さまざまな背景に関わることになり、水面下の問題は私たちだけでは難しく、関係機関につなげながら進めています。

これは社会的問題でも、この国に真剣に取り組んでいってほしい課題です。日本は性教育も遅れています。人権教育の中の要なので、女性も男性も性の自決力を高める教育を充実させることが必要だと思います。

ロックされるケース。高校生や大学生はバイト先で知り合いの交際することが多く、頻りに会うので相手のことを知った気になっていますが、実は本名や住所を知らなかった



■現在の課題や、今後の展望は？
活動資金は一番大きな課題です。今は日本財団

り。妊娠に気が付くのが遅く、相手とも別れていたりすると、特別養子縁組を選択するしかない場合もあります。中絶は、12週未満が初期中絶、12週〜21週と6

日までが中期中絶。中期中絶は入院が必要でリスクも多々あり、扱った病院がとて少ないため「病院が見つからない」と相談に来られるケースもありません。

もし周りに妊娠で困っている方がいたら、ぜひ地域の「にんしんSOS」を検索し、相談を勧めていただけたらと思います。

今後は、妊娠中からの虐待予防対策をさらに進めたいですね。孤独にならない仕組みを作り、その後も困った時につながり続けられる居場所を作れたら。そして、女性だけでなく男性にも、妊娠、出産、子育てについての知識を持ってもらいたい。

また、私たちがいかに知ってもらうかも課題です。つながることが難しい人たちと、どうやったらつながれるか。10代、20代前半の人たち向けにはLINEアプリを開発中で、ホームページもリニューアル中です。